

地球一周の船旅 2016 ②

【アジア編】



2017年2月

旅のチカラ研究所 植木圭二

地球一周の船旅を2016年4月12日～7月26日の106日間で行ってきた。この様子は洋上特設ブログと称して、ほぼリアルタイムにインターネットで公開していたが、このほどブログ(日記)ではなく旅行記として書き改めたものをここで発表する。

今回はアジア編として日本出発から南シナ海、マラッカ海峡、インド洋、紅海、スエズ運河通過までをまとめた。

第一章 太平洋～東シナ海

■出航イベント

乗船するとドラが鳴ってテープ投げかと思いきや、まずは避難訓練がある。停泊している間に避難訓練を実施し、その後に出航式になる。

見送りには私が勤めていた会社の元後輩Tくんが来てくれている。Tくんからは一昨日にいつ出航ですかという問い合わせがあり、明後日と答えると見送りに行きますと言う。熱い男でその淡々さに感激する。その彼にテープを4本投げるが届かず全て失敗する。風が強いのでテープが届いた人はほとんどいない。意外にこのテープ投げはここ横浜の大栈橋では難しい。



全乗客を集めたオリエンテーションが始まり、基本的な数字が紹介される。

乗客は全体で約 1000 人、横浜で 500 人、神戸で 350 人が乗船し、フライト&クルーズという飛行機で途中乗船する人が 150 人である。女性が 60%で男性 40%、10 代~40 代が 20%、50 代~60 代が 45%、70 代~が 35%で最高年齢は 92 才という説明である。

やはり女は元気で強い。理由は単純に平均寿命が高いからというものもあるが、お金の使い方のような気がする。男は居酒屋とかゴルフかというように小さくお金を使う。女はコツコツ貯めて一気に使う、思い切りが良い。

そして乗客以外ではクルーが 350 人、ピースボートのスタッフが 50 人、内訳は英会話の先生 10 人、通訳 10 人、記録班 4 人、事務局スタッフ 20 人でスタッフの最年少は 20 才という。

部屋に戻ると、早速妻は映画を見に行く。私は部屋で飲みながらこの原稿を書く。音楽は懐かしのフォークソングである。この旅のために家にある CD を SD カードにコピーしてきた。あの CD 何十枚が一枚にカードになるなんて時代の進歩である。

私が入社して光ディスク装置を研究開発していたときには、まだ CD は世の中には存在していなかった。CD が出たときは画期的であったが、当時の再生装置は 10 万円くらいしていた。しかし、それでもなんでこんなに安くできるのかと研究所の技術者みんな驚いていた。なぜなら光ディスクというのはレーザー光線で情報を読み取るが、このレーザー素子が 15 万円くらいしていたのである。だから当時の技術者仲間の言葉は一万円札を何枚つけて売っているのかである。

それが何千円まで下がり、さらにその何十枚を一枚の小さなカードに収めることができるとは信じられない。この航海は私の技術者人生を振り返らせてくれるかのようである。

翌日は神戸に立ち寄るが、私たち横浜乗船組は出国審査が済んでおり下船できない。

若い女の子が泣いている。「めっちゃ、うれしい」行く前のテープ投げで感動しきっている。そんな姿を横目で見ているとあまり感激しなかった自分に気が付く。この感激を取り戻そう。

神戸を出ると色んな仲間づくりイベントがある。

出身県別に集まるイベント。私たち夫婦も出身が群馬なので群馬に行っても良かったが 22 年住んでいた群馬ではなく、35 年住んでいる神奈川を選ぶ。9 人の年配者や若者が集まる。

一杯飲みながらのイベントもちろんある。おばさん、おじさんと同じような年齢層が集まっ

た。みんな友だちづくりを目的にきている、だからみんな積極的だ。それでも自分のことばかり言う人や聞き役に回っている人と役割分担が何となく決まってくるのが面白い。

元中国人のおばさんの苦勞話になる。中国国籍というだけで日本では不当な差別を受けるというので日本国籍にあこがれていた。日本のホームレスはそのあこがれの日本国籍をもっているのに何もしない。何を考えているのだという話であったが、酔っぱらっているし初対面であり突っ込むところでもないで聞き役に回る。本当にいろいろな人が乗っている。

船長主催のウェルカムパーティが開催される。このためにスーツを一着もってきた。妻はパーティドレスである。やはり女性はいろいろ大変であるが、その効果も大きい。それは男よりも確実に豪華に変身できる。子供でも年配者でも、男は変身の幅があまりにも少ない。

■ 船旅に馴染んでいく

東シナ海を航行している。それにしても船が揺れる。雨も強く降っているのでトイレ、廊下などの共有スペースの何か所では雨漏りもしている。老朽化が進んでいるこの船もそろそろ定年退職かもしれない。

翌日、まだ濡れているデッキをウォーキングする。ウォーキングコースは最も長くって一周420歩ほどである。よく言われる一日10000歩のためには20周以上必要であるが、とりあえず10周にする。周りが全て海の変わらない景色を眺めるウォーキングは単調なので10周くらいが限界である。

ゴルフの打ちっ放しがある。ゴルフショップなどで店内にあるものと同じ「鳥かご」とも言われている設備だ。海に向かって打つのは非常に気持ちが良いが、船の揺れが微妙にスイングに影響を与える。ボールは止まってはいるが、地面が波の周期で傾くので独特の感じになる。まあいいか、この環境で練習すれば地上で練習するよりもうまくなると信じるしかあるまい。

沖縄石垣島の東方沖を航海中。波はほとんどなく、天気も良い。穏やかな航海である。

外洋に出た船上からホームページのアップやメールを送るためにインターネット接続する手段としては通信衛星経由になる。そのためにはそれなりの手続きにより船内のWi-Fiに接続する必要がある。そのWi-Fiがつながるエリアが船内で限られていて、パソコンを持参してきた人達がこのエリアに集まり、どうやったら衛星回線につなぐことができるのかという質問が飛び交っている。

子供が設定をしてくれたので持ってきたとか、昨日買った新品を買って持ってきたとか、全くわからない人ばかりである。それでも親切な人がいて、そんな迷える子羊を助けるボランティア活動が始まる。わからない者同士でも情報を共有し、知恵を出し合えば何とかなるといふ。教える人も決して専門家ではないが、子羊たちは確かに何とかなっている。

被災地現場の助け合いの暖かさみたいなものを感じる。私も2匹の子羊を助けることができた。中高年の多い船旅ならではの光景だ。

ちなみにこの通信衛星への接続費用は90分で2000円とかなり高い、そして通信速度が非常に

遅い。ふた昔くらい前のインターネット方法に電話回線で接続するダイヤルアップというのがあったが、感覚的にはそのくらいの遅さである。そしてその結果、結構な費用になる。

熊本で震度7の地震が発生したニュースが飛び込んできた。九重高原の友人の別荘は大丈夫だろうか心配である。

各種情報を乗客に知らせる方法としてこの船では5つある。

各船室にスピーカがあるので船内放送、各船室にはテレビもあるので船内テレビ放送、いわゆる手紙・ポスティング、毎日各船室に配達される船内新聞もある。そして共通エリアの掲示板に張り出して、みんなが見に来るという方法もある。どれも普通に使用されている。

日本で起きているニュースは掲示板に張り出されるので、壁新聞を読むような感じで情報を得る。掲示板は船側からだけでなく、乗客同士が仲間集めなどにも使えるボードもある。

そんな掲示板を何となく見ていたら寄港地でゴルフラウンドしませんかという仲間集めのビラがあったので早速、参加の意欲を持って行ってみる。

集まったのはちょうど4人、呼びかけたのは年配の女性リピータである。前回乗船時にも数か所の寄港地でゴルフをしたという。彼女は英語が堪能なので港からゴルフ場までタクシーを呼び、予約やコスト交渉もしてくれるという。早速ゴルフ発祥の地イギリス、ドーバーでやろうということになる。

初めてサウナに行く。この船はデンマーク建造なので大浴場がなく、各船室にシャワーがあるだけである。温泉大好きの私にはつらい日々なので、サウナを代替えに過ごすことにする。

サウナは一回500円、10人くらいは入れるサウナ室とシャワーが2つあり水風呂はない。入ると先客がいて早速話始めると、やはり風呂大好き人間とのことである。

船室にバスタブがないのでなんと簡易風呂桶を持参したそうである。プラスチックの大きい衣装ケースに荷物を入れてもってきたので、その衣装ケースにお湯を張って半身浴をしているそうである。経験者からのアドバイスとのことであるが、先人の知恵や情報は貴重である。

夜は「波へい」という居酒屋がオープンする。昨夜そして今晚も、面白そうな人たちと出会うので連荘で出勤する。(ん！出勤・・・、まるで仕事になりそう)

通訳スタッフとして乗っている女の子も一緒になり大変盛り上がる。この船では通訳が10人くらい乗っているが通称はCC (Communication Coordinator) と呼ばれている。そのCC仲間がどんどん合流して10人ほどの宴会状態になっている。

その時に会話した20代女性CCのAちゃんの話に興味を引かれる。通訳業務の大変さや面白さを楽しそうに話し、この船旅は初めてであるがとても充実しているという。特に世代を越えて話ができるのが勉強になるそうで、政治、経済、環境問題など話し始める。おそらく通訳とはいろいろな分野にそれなりに知識がないとできないのだろう。その前向きさとキャッキョウ言いがら大酒を呑むというバランスがよい。スキージャンプの高梨沙羅に似ている。

本日は時差調整日になっている。飛行機の場合は出発地点の現地時間が数時間にフライトで到着地点の現地時間にいきなり切り替わるが、船旅の場合は数日に1時間ずつ時差を調整する。

通常、経度で15度ごとに1時間標準時がずれる。そのため西回りの航海の場合は1日が長くなる方向で調整する。

具体的には夜の24時になるときに23時に船内の時計の針を1時間戻し、その日だけ1日25時間にする。地球一周をすると24回これを行い、日付変更線を通過するときに1日消滅する。

船旅ならではの、それも地球一周ならではのイベントである。

■東シナ海は真夏のようだ

船は穏やかに南下している。もう真夏の暑さで、プールもジャグジーもオープンしている。若い女性もいるのでビキニ姿もたくさん見受けられるのがこの船の良いところかもしれない。

この船を選んだ理由の一つに乗客の平均年齢がある。他の豪華客船は約70才というのに比べてこの船は46才と聞いた。働き盛りの30代40代はいないが、20代の若者が平均年齢を下げている。

旭山動物園の坂東園長が乗船しているので本日講演を聞きに行ったが、動物の集団社会についてふれる中で、日本の高齢化社会の話題になる。一人の年寄りを若者何人かが支えるという発想ではなく、この船のように高齢者が若者を支えるというようにしたら全く違う世の中になるのではないかという話である。

この船は29才まで若者割引がある。一般的にシニア割引はよくあるが、ここでは逆である。結果的には乗船客の8割の中高年が2割の若者を経済的に支えていることになる。

だからなのか若者たちがいろいろな企画の中心になる。中高年でも元気な人も多いが、やはり若者は動きが速い。何となく役割分担ができていような気がする。

若者のやる気や意欲に中高年の知識や経験を融合させて社会をつくるということだろう。偶然かもしれないが、それをこの船は実践しているような気がする。日本の高齢化社会への対策として一つのヒントかもしれない。

初めての日曜日であるが、既に曜日の感覚がない。船に乗っているのと定年退職をしたのと両方の理由である。

旧日本海軍そして現海上自衛隊でも航海で曜日の感覚がなくなるので、金曜日にはカレーライスが出される。海軍カレーはここから始まったのだ。

留守宅にいる息子への定期連絡メールを日曜日と決めているので、本日メールを入れる。

一週間が経過し船内生活にもだいぶ慣れてきて、ペースが出来上がってくる。

朝から真夏の日差しで直射日光がまぶしい。いつものように朝7時からの約40分のウォーキングから始まり、9階のカジュアルなレストランで朝食をとり、船内新聞を見ながら一日の予定を立てる。

第二章 南シナ海～マラッカ海峡

■芸は身を助ける

本日は船内イベントとして乗客の芸達者を集めて芸を披露する「スター誕生」なる船内イベントがある。

私も実は大学時代 4 年間は落語研究会に所属しており、大きな市民ホールなどで 1000 人くらい集めて公演会を開催していた。昔取った杵柄ということでこのイベントにエントリーしている。

大学を卒業して 37 年たっているが、定年を機にゼロから始めるより良いだろうと落語やギターを復活させるつもりなので、今回はその手始めにする。

制限時間が 3 分と決まっているので、古典落語は全部できないので枕部分のみをやることにする。この 3 分間のために会社の送別会で 2 回ほど練習公演を行ったが、出来はまずまずで好評であった。落語を生で見たことがない人が多いのでインパクトがあったのかも知れない。

船に着物を持ち込もうとは思ったが、暑いことや洗濯が大変なので浴衣にする。大学時代も夏の公演は浴衣で高座に上がっていた。今回は大学時代に父が織物関係の仕事をしていたので部員お揃いのハッピーを作ったのでこれを羽織ることにする。

600 人程収容できる一番大きなホールは満席である。スポットライトがきつく観客は見えないが本当にたくさん入っている。

大学 1 年生で初めて高座に上がったときよりも緊張している。

それでも何とか 3 分間を乗り切り、大好評である。イベント終了後、会う人会う人からはお褒めのお言葉をいただく。また聞かせてくださいなどというリクエストも多く、また違う話を練習しなくてはならなくなった。ここにきて大学落研が活かせるとは人生捨てたものではない。

落語は口で覚えるもの、うむ、それは英語についても同じことがいえるかも知れない。英会話の勉強法を変えてみようと思う。



それにしてもこの船には、いろいろなすごい人が乗っていることを改めて実感する。26 組の出演者の半分以上は町内会の演芸大会やカラオケ大会のノリであるが、数人はプロのレベルの人がいる。演芸だけでなく、船内で人を集めて各自がいろいろな自主企画を立ち上げているがそのレ

ベルも非常に高い人もいる。あるいは英語ペラペラや多くの資格を持っている人など様々である。

成功した経営者に話を聞く機会が現役時代に多くあったが、その人達はみんな仕事だけではなく必ず一芸か二芸に秀でているのもっていることを思い出す。それが人間としての幅を広げて、厚みを持たせて社員や取引先から信頼を得るのにつながるようである。

この船旅に参加する人は、社会的に成功している人が多い。それは主には経済的なことかもしれないが、お金だけではなくこのような旅に行ってみようとか、何かに挑戦しようとする意欲や好奇心が重要なのである。

文化人や知識人が乗船しており講演をしたり、乗客と生のふれあいしたりしてくれる。日本からマレーシアまで旭山動物園園長の坂東さんが乗船しており、私も講演を聞く。

話は動物の中の一品种が人間であるという観点の発想が根本にあり、その切り口で人間とは、社会とはという話がとても興味深い。

この人も酒好きで必ず居酒屋で見かける。明日下船ということで一緒に写真を撮る。

船内で仲良くなった東北の S さんから声を掛けられる。先日の落語がとても良かったので機会を作るから、再度やってもらえないかの出演依頼である。それほど評判が良かったというのは大変ありがたい話であるが、3 分間以上の本篇は練習していない。

チャレンジするしかない気持ちになってくる。この旅は自分を変える。

■初寄港はマレーシアのコタキナバル

私たち夫婦にとってマレーシアは 2 回目である。前はマレー半島の先端のジョホールバルでシンガポールから入ったが、今回はボルネオ島である。マレーシアはマレー半島とボルネオ島の大部分といくつかの島からできている大きな国である。コナキタバルはボルネオ島のサバ州の州都でマレーシア第二の都市である。

ウォーキング、朝食など通常朝の日課をこなしていると 9 時過ぎには下船許可が出たと船内放送が流れる。パスポートは不要で下船乗船のために ID カードだけで良いとのことである。パスポートは横浜乗船時に船に預けたままである。

寄港に先立って前々日に全乗客対象に寄港地説明会が開催され、現地の気温や治安などの基礎知識、下船乗船の手続き、見どころなどを 1 時間ほどかけて説明してくれる。さらに書面による寄港地情報が各船室にポスティングされるのでそれを見て準備をする。

下船すると民族衣装を着た現地人のお出迎え隊がいて、歌や踊りでこの地の魅力をアピール、乗客全員に首飾りをプレゼントしてくれる。

入国検査として簡単な検査を受ける。飛行機に搭乗する前の手荷物検査と同じで、カバンをコンベアに乗せて X 線で荷物の中を見ているが、飛行機のものに比べて簡単である。

船のオプションツアーのために 20 台くらい大型バスが待機している。バスは順次出発していく。オプションツアーに乗らず個人行動をする人達をねらってタクシーが盛んに客引きをしている。

今回、私たち夫婦は行き当たりばったりで徒歩散策するので、タクシーにも乗らず港から市街

地まで歩く。15分くらいの道のりだが、30℃超の暑さと日差しがきつい。それもそのはずで私の体はまだ4月の日本のままで真夏の準備ができていない。

大きなショッピングセンターに入りなんとか涼を得る。両替をUSドルからマレーシアの通貨リングギット(RM)に交換する。旅に出るにあたり日本円以外はUSドルとユーロを持参した。この3つの通貨以外はクレジットカードさえあれば問題ないようで、3つの通貨のどれかから現地通貨に交換できるからだ。

本日のレートは50USドルが190RMである。高いか安いかは分からないが、とりあえず50USドルあれば足りるだろう。

ダイソーが近くにあったので日用品の不足分を購入する。ただし日本の100円ショップとは違い現地では比較的高級店らしい。やはりメイド・イン・ジャパンの魅力なのだろう。

そんなことで何となくウロウロしていると居酒屋「波へい」で知り合いになったOさんたちと合流する。Oさんは報道関係の仕事をしていた人で、彼の手帳を見せてもらったが小さな文字でびっしりと船内や寄港地のメモが記されており、私は勝手にブンヤのOさんと呼ぶことにする。

男女合わせて9人で炎天下のコタキナバルの街の散策になる。海と小高い山の間には街があり、古い汚い建物が立派な高層ビルに生まれ変わろうとしていて経済発展の途中の姿である。

まずはその小高い山を目指して登り始める。ビル街から250mというハイキングであるが、緑の中に入ったとたん南国特有の木々が生い茂る。汗びっしょりなりながら頂上の展望台までいく。標高は高くないが、海風が気持ち良い。ここもまた別世界である。



市街地は信号機が少なく、ロータリーのような合流方法で交通をコントロールする仕組みになっている。そのために歩行者は道を横切るのが大変である。車が来ないタイミングを見計らって横断するのだが、9人旅にはなかなかきつい。

昼は現地の人が利用するフードコートに入る。屋台村のようになっており複数の店が料理を提供し100人くらい座れるテーブル席で食べることができる。最初はそのシステムがわからずに戸惑っていたが、だんだん理解してきた。理解した頃には食べ終えて出発であるが、私たち夫婦はチキンカレーを食べ、2人分14RMを支払う。日本円では250円くらいなので、物価としては日本の半分くらいで安い。

食後は博物館を目指し炎天下を黙々と汗をかきながらの歩き旅である。街の散策などというお

しやれな感じではなく、過酷な酷暑行進と化してしまう。地図で見るよりも遠くにある感じでなかなかたどり着かない。こまめに休憩をとりながら約 2 時間かけて博物館に到着する。

みんなの顔に安ど感、そして涼しい博物館に入り疲れをとる。入場料はマレーシア人 2RM、なんとマレーシア人以外は 15RM とのことである。日本でも町営施設などで町民優遇の料金体系をとるところもあるが、これほどの差にはびっくりする。

みんな疲れ切って帰りはタクシーにすることになる。ただし 9 人なので 3 台に分乗する必要があるが、2 台しかタクシーがない。交渉の末に 4 人と 5 人で分乗して 1 台あたり 25RM ということで交渉成立である。法律を破っての営業は日本ではとても考えられない。

夕食はもちろん船内で食べてもよいが、せっかくの異国の地なのでコタキナバルのレストランか屋台でも行かないかと 3 日前に誘われていた。これも居酒屋「波へい」友達の Y さんからの誘いである。

Y さんはヨットマンで、何か頼りになるというイメージもあってポパイを想像する。

そしてもう 1 名若い G ちゃんを加えて 3 人である。G ちゃんはこの船では珍しい 40 代の独身男性で、普通のサラリーマンならばとても 100 日以上長期休みは取れないが、彼は建築関係の自営業である。親方から嫁を見つけてこいという崇高なミッションをもらっての乗船である。

実はこの船にはこの世代の男性はほとんどいない。その希少なミドルエイジの G ちゃんはまさしくナイスミドルで、きっと崇高なミッションは達成できるであろうと私は思う。

屋台が多く出ている海のそばのテントできた大衆レストランに入る。ビールはあるかと質問すると今はないが問題ない、買ってくるという答えが返ってくる。そうここはイスラム教の国なのでアルコールは禁じられている。昼食をとった食堂もそうであるが、地元の人が行く食堂、カフェではアルコールは置いていない。

買ってくるとは申し訳ないのと、生ぬるいビールが出てきたら最悪なので、自分たちで調達してから持ち込むことにする。近くのセブンイレブンで購入 350ml の缶ビールが 10RM、つまり 300 円～400 円である。物価は日本の半分くらいと思っていたが、ことビールについては 2 倍である。

潮風にあたりながら夕食である。地元の人が多いが観光客もちらほら見える。

この屋台は家族経営らしく、小学生くらいの少年がウェイターの役割をしている。この少年が将来の店主になるであろうと Y さんが少年に頑張れよと何やら話している。マレー語でも英語でもなく日本語であるが、何となく通じているようだから面白い。

船に戻る門限にあたる帰船リミットが寄港地ごとに決められる。本日の帰船リミットは 21 時なのでまだ時間はある。もう一軒行こうと観光客相手の料理店に行く。それは現地通貨リングギッドをここで使いきれないといけない。以降の寄港地では全く使用する予定がないからだ。店に着いたら 3 人の有り金をテーブルに全部出して、タクシー代を残して無くなるまで注文する。こういう飲み方も面白い。

帰船後の出航パーティが開催される。後部デッキでバンド生演奏もあり盛り上がる。そこは居酒屋「波へい」のすぐ隣、私はまた今晚も出勤している。

■船上バーベキューは最高

バーベキュー（BBQ）パーティがある。場所は船尾のデッキ、参加は予約制で 3500 円飲み放題である。居酒屋友達のメンバーに誘われ参加するがシンガポール間近なのでほぼ赤道直下、さすがに熱い。

プールサイドでの BBQ は格別で、バンドの生演奏もあり大いに盛り上がる。ペアで社交ダンスのように踊り出す人々、縦に列を組んで昔はやったジェンカのように隊列をなす人々、肉や野菜を焼く人、飲む人、写真を撮る人、みんな様々に楽しんでいる。

それを支えているのが船のクルーたちである。彼ら彼女らが準備や料理を運んだり、片づけてくれたり、私たちが楽しむことができるわけだが、いったい彼ら彼女らにはこの酔っ払いの光景はどのように感じるのだろうか、ちょっと聞いてみたい気がする。

それにしても昼間からのビールは効く。

■航路説明会

シンガポール寄港の航路説明会に行く。面白い話を 2 つ聞く。

ひとつは影の話。船で航海中にちょうど太陽が真上から照る時があるので、その時は影ができないという。ポールの真上から太陽が照り、影がない写真が紹介された。マラッカ海峡からインド洋の途中で遭遇するという。こんな体験も船旅だからできる。

そして海賊の話。インド洋から紅海に入るところでは海賊が出るそうで、日本の船がこの海域を通過する場合は海上自衛隊の艦船が護衛してくれるという。海賊に発見されないように船独自の対策として夜間はデッキの照明を消して、カーテンを閉めて明かりが漏れないようにするという。その昔に母親から聞いた戦争中の灯火管制ようである。

何回かこのような説明会を聞いているうちに、この船の組織上の仕組みが徐々に見えてくる。というのは船内には 3 つの組織が存在し、それぞれ責任者のような人がいるので一体どんな役割分担なのかが分かりにくい。

まずピースボートという NGO（非政府組織）があり、このピースボートは主に船内イベントを担当しており、対外的には船の顔でもある。この航海におけるトップがクルーズディレクターという役職である。

そして船旅という旅行を催行としているのが旅行会社のジャパングレイスである。株式会社でオプションツアーの手配や旅行代金の回収などもこの会社が担当する。そしてこの航海におけるトップが事務局長である。この旅行会社はこの船だけが商売の範囲である。

そして船の運航を担当しているのが船会社のシーホークコーポレーションである。当然トップは船長で、船なので洋上に出れば最高責任者である。船長は外国人である。ただ、この船会社はどちらかというと船の運航のみであり表に出てこない。まあ、旅行会社が観光バスをチャーターした際の下請けのバス会社のようなもので法的な運航責任はあるが、コースや費用、日程などは契約主の指示に従うという感じである。ここと契約を結んでいるのがピースボートかジャパングレイスかはわからない。

いずれにしてもピースボートとジャパングレイスが表裏一体のような関係でどちらが主なのがよくわからない。一応の役割分担はわかるが、うまく連携していると言えればそのよう責任が

明確でないとえばそうともとれる。

■非常事態発生、妻が大変だ

朝 5 時頃、ドーンといきなり大きな音がして飛び起きた。船が何かにぶつかったのかと思ったがそうでもない。

妻がベッドから落ちて倒れている。頭から出血しているようで痛がっている。すぐ止血するために本人が大きな絆創膏みたいなものを出して貼り付けているが、出血は止まらない。ティッシュペーパーを大量動員して、20 分くらいでようやく止まる。

どうやらベッドの端で寝ていて寝返りを打って落ちて、落ちるときにベッド脇にあるライトスタンド（小さなテーブル）の角に頭をぶつけて落ちたらしい。そのライトスタンドの角が鋭角なのでそこで切って出血したようである。確かにその角は金属で鋭角になっている。

私が勤めていた会社では、このような鋭利な角をシャープエッジと呼び、これは製品審査の段階で失格になる。私は大手電気メーカの技術と品質の仕事をしていたので、そんなことをよく知っている。このシャープエッジは出荷停止レベルであろう。

血も止まったので、船の診療室は 9 時 30 分から開くのでエマージェンシーコールせずにそれまで待つことにする。ただ妻は痛そうで冷たい氷で冷やしてくれと言っており、私は止血するには冷やすより温めたほうが良いと勧める。

それはヒゲをそって出血した場合は血液を固めるために熱いタオルで温めて止血するように高校の保健の授業で習ったからで、45 年前の教えを今思い出した。でも妻は冷やしたいということで、それに従う。45 年前に教えてくれた左とん平に似ていた S 先生ごめんなさい。

9 時 30 分に診療室が開くので時間を待って早速訪れる。20 代の若い看護婦さんが応対してくれて、症状を話すとすぐに先生の診察になる。結局縫合したほうが良いということになり、なんと 7cm の縫合となる。

私はといえば痛々しいので縫合には立ち会わず、その代わりに船内の事故ということで船の安全管理責任者（CSO）の現場検証に立ち会う。船室まで戻り状況を説明し、書類に記入したりである。

何とか縫合も終わり診療室を出る。費用は約 10000 円を請求される、もちろん海外旅行保険で後日請求できる。国内健康保健は効かないが海外診療制度というのがあり、同様なケガや病気を国内で治療した場合と同等の費用は請求できる。

■シンガポール寄港

4 月 22 日シンガポールはフリーで街の散策に出る。妻の傷の件もあり、あまり無理をしない。

シンガポールは 2 回目の訪問で、前回は 20 年ほど前なので大きく変貌している。マーライオンやセントーサ島ではなく、前回の訪問時にはなかったマリーナ・ベイ・サンズホテルとスーパーツリーを見に行く。

マリーナ・ベイ・サンズホテルは屋上に船を乗せたような高層ホテルで、3 つのタワーで船を支えている。船の部分にはレストランやバーそして屋上はプールになっているが、残念ながらプールは宿泊客しか入れない。レストランも高そうでドレスコードがあるのでサンダル履きの今日のスタイルでは難しい。

タワー部分はホテルになっていて、客室は建物の両側に寄せられているので中は大きな吹き抜けの空間になっている。当然のようにすべて空調が効いており快適だが、これだけの空間を常に適温に保つには相当の電力が必要になる。



スーパーツリーは巨大な人工の木である。高さ何十メートルの大きな木が10本くらいある。木といっても先が開いている夜のイルミネーションの写真が紹介されることが多い。

桁違いなスケールに圧倒される。この斬新なデザインとそれを実現する建築技術には脱帽する。

地下鉄で移動するが、地下鉄も以前来た時に比べ、路線が倍くらいに増えている。乗車券を買うシステムは最初戸惑ったが、比較的わかりやすい。タッチパネルに向かって行きたい駅を駅名か地図で指定する。地図を指定すると全体図が表示されて、そこから画面タッチして絞り込み、確定したら金額表示されるので最後はお金をいれて切符が出てくる。もちろん英語表示であるが英語ができなくても何ら問題なく操作できる。

いずれにしても、どこに行きたいという明確な目的地が必要である。その辺をぶらりというのは始末が悪い。人生も同じで、まずどこに向かうか決めることが重要なのであろう。

それにしても日本の地下鉄は外国人が容易に切符を買うことができるのだろうか、東京オリンピックをひかえて心配である。

食事はフードコートで中華麺を食べる。一人日本円換算で600円くらい。物価は日本と同じくらいである。ここのフードコートは中華以外に韓国やインド料理などアジア圏の料理も豊富である。日本料理を見つけたが、看板のみで閉店している。大丈夫か日本・・・。

街はきれいである。ゴミを捨てるなどか、騒ぐなどかを法律で規制しているので治安も秩序も良い。そして英語国家なので東南アジアへの進出する欧米企業の橋頭保になっている。この国の進歩発達は日本の高度成長期のようなものである。

シンガポールは活気あふれて躍動している。

港に戻ると中国の豪華客船が隣に停泊している。出かける時にはなかった船で、私たちの船よりもひと回り大きい。とうとう外洋大型客船のクルーズも中国の時代が始まろうとしている。

そして帰船してもう一つ驚くことは、自分たちの乗っているオーシャンドリーム号の船内見学会を開催していることだ。日本でも国内寄港地で見学会を開催してお客集めをしていたが、シン

ガポール人を相手に乗客の拡大をはかるようである。国際色豊かになり面白いが、船内の暗黙のしきたりやサービスがどう変わるのか。

いずれにしても欧米に追いつき追い越せから、アジア諸国に追い抜かれようとしている日本の立場というものを再認識する。

シンガポールはこの船のクルーにとっても大きなことがある。それは 350 人程いるクルーうち 100 人程がここで下船して入れ変わる。船室のベッドメイクするメイドやレストランのウェイターなどはインドネシア人が多い。年 3 回の地球一周には必ずシンガポールに寄港するので、ここで乗船して 2 年くらい船で働き、またシンガポールで下船するというシステムのようなものである。

私たちの部屋を掃除してベッドメイクしてくれるインドネシア人の彼はちょっとシャイで誠実そうで人柄である。妻のケガの時にも心配してくれているのが言葉や態度に現れていてとてもありがたい。後方デッキのあるオープンバーや居酒屋で働く彼女たちもとても優しく素敵なお客様のためのサービスが忘れられない。

低賃金なところがインドネシア人の採用理由と思うが、その誠実さや勤勉なところも採用理由にあるに違いない。

一年前のクルーズの旅行記で書いたが、「リゾートとは貧富の格差が成せるものである」という。使う側と使われる側、そしてその格差があればある程リゾートがよりリゾートとして成立する。リゾートとはそういうものだそうで、リゾート感を満喫する心の奥底にはその格差による優越感のようなものがあるのかもしれない。

しかし、今回のクルーズではもう少し違う感覚を感じる。優越感ではなく、インドネシア人の彼ら彼女らの誠実さ優しさにむしろ感謝する。あるいはそれが紳士ということかもしれない。

夜 10 時シンガポール出航、出航パーティが行われる。私はいつものように居酒屋に出勤する。

■マラッカ海峡

昨夜シンガポールを出航し、マラッカ海峡を航海中である。天気が悪いので陸地は見えないが、あるいは天気が良くても兩岸の陸地は見えないかもしれないが、貨物船、タンカーなど多くの船が見える。さすがにマラッカ海峡である。

水深が浅いのもこの海峡の特徴らしく、海の色が緑色をしている。航海情報では水深 37m ということである。

居酒屋で飲んでいる時にヨットマンの Y さん聞いた話だがこの船は 8 m が限界深度という。以外に少ないと感じる。そんな深さしか海面下になのかとびっくりする。

船の 8 階共有スペースに張り出されている航海情報では 17 ノットで運航している。17 ノットというと 1 時間に 17 海里移動する、1 海里が 1852m なので、時速 31km ということになる。

イベントが何もない日がある。映画デーと称して船内の各ホールは映画館と化している。多分乗船スタッフの休日に充てるので労働基準法への対応もあるのだろう。うまく考えたなと感心する。

第三章 インド洋

■ここは赤道近い、インド洋

マラッカ海峡を抜けてインド洋に入る。波がほとんどなく、当然揺れもほとんどなく快調に船は航行している。関係者に聞くとインド洋がこんなに静かなのは珍しいという。

そして2日連続の時差調整日である。2日連続ということは、経度で15度以上も進んでいるはずである。しかも赤道に近いところなのでかなりの距離を進まないといけない。赤道の総延長つまり地球の外周は約40000kmなので、15度はその1/24で約1660kmもある。

航行は時速31kmなので24時間では744kmかかり、1660kmは2日ちょっとかかるはずである。したがって赤道近くを航行する場合、1つの時差ゾーンを抜けるのには2日間以上必要になる。だからこの速度で2日連続の時差調整というのは本来ありえない。きっと一日の途中で時差調整をすると船内生活がややこしくなるのでこんなこともあるのだろう。

それにしても地球の大きさを計算しながら旅をしている自分がいることに気が付く。そんな旅をしているのだと見渡す限りの水平線を見ながら感動を感じる。

今夜は満月で月の光が海面に反射してとても美しい。この船旅で3回は満月に遭遇するはずである。

シンガポールで仕入れたたくさんのフルーツを食べるフルーツパーティがメインレストランで開催される。

お馴染みのマンゴー、スイカ、メロン、ちょっと珍しい星形をしたスターフルーツ、独特な形をしているドラゴンフルーツ、そしてフルーツの王様と呼ばれるドリアンと約20種類くらいが出てきた。ビュッフェスタイルで提供され、1時間の制限時間で生バンド演奏というパーティである。スイカみたいな果実を見事に彫刻するケービングの実演も面白い。



2000円のチケットを事前購入したが、その価値はあるように思う。南国でないと食べられない新鮮で豊富なフルーツを多少リッチな昼間のパーティで食べることができるのは船旅ならではの計らいである。

ドリアンはアルコールとの食べ合わせが悪いということをパーティ終了ころ説明がある。そんな話は初耳だと、顔を見合わせる男性陣が多い。TVコマーシャルの「早くいってよ〜!」である。

■カルチャースクール

カルチャースクールの講師の人たちを紹介するイベントがあるので参加する。時々利用する山中湖のペンションのオーナーから友人の絵描きが水彩画教室の講師で乗ると聞いており、ペンションに行ったとき話もできないと思い参加する。

映画フラガールにダンサー役で出演していたというフラダンスの先生は、子供のころからジャズダンスをやっていて女優を目指して状況して映画のオーディションを受け出演がきまり、それからフラダンスを3か月で練習して撮影本番を迎えたという。

20才の時だそうでそれから彼女のフラダンス人生が始まったという。3か月という今回の船旅よりも若干短い、だから皆さんもできますということである。フラガールは私も感動した映画であるが、制作側内部にもこんなドラマがあったことに感心する。

社交ダンスの先生は、高校大学時代に創作ダンス部の部長でメンバーに対して指導していたという。創作ダンスとは我流ではなく、各ダンスを一通り習って基礎を作ったのちに、融合させて創作していくというので、各ダンスの基礎がある。それからジャズダンスをやるようになり、アメリカ留学した後に社交ダンスをすることになり、講師のプロ免許を取得して15年のキャリアがあるという。

水彩画の先生もしかり、国際的な大きな賞に初挑戦で初入賞、絵画教室に指導歴も20年くらいある。

何より驚いたのは実際に彼が描いた作品が紹介されたときである。会場全体がどよめく、まるで写真のような絵画である。山中湖周辺の森の中の絵画であるが、実際にはそんな光景はないそうであるが、テーマを決めて創作するという。

その他の講師もみな一流の経歴、実績がある。その実力も引き出しが一つではなく、本業を支える周辺の引き出しが多い。そして実力のみではなく個性がはっきりしているのと社交性や積極性がある点が共通している。

経歴を聞いているとみな人生のどこかで勝負をかけた時があることに気が付く。成功者の人生の歴史は感動をする。

そんな方々でないとこの船の乗客のような人生経験豊富な人々に教えることはできないだろう。

■結婚記念日

4月25日は私たち夫婦の結婚記念日である。1982年結婚から実に34年になる。

新婚旅行でフランス、スイスに行った際にもう2度とヨーロッパには来られないだろうから、しっかり目に焼き付けていこうと言ったことを覚えている。それが2度どころか既に5回くらい行っていて、さらに今回の地球一周船旅ではヨーロッパ各国に寄港とは信じられない。

本日はこの船で知り合った友人たちが、夕食の時に結婚記念日を祝ってくれる。同時に誕生日

の方がいるので、そのイベントに同乗させてもらう。

船では毎日のように誕生日を祝うイベントが行われている。イベントの内容は食事にシャンパンをプレゼントされテーブルにクルーが数人来て「ハッピーバースデー」を歌ってもらいバースデーケーキがふるまわれる。1000人も乗船客がいれば1日3人くらいは必ずこの歌は歌われる。ちなみに世界中で一番歌われている歌はこの「ハッピーバースデー」だそうだ。

今回のクルーズでは結婚記念日は初めてのようで誕生日同様にシャンパンを頂き、みなさんに祝福される。Yさんからはプレゼントまでもらい、同席の女性からも折り紙で作った冠を妻がもらう。人生経験というか気配りであろう。ちょっとした気持ちであるが見習いたい。



レストランを出たところで、知らない若い女の子にも祝福される。船で結婚記念日を祝ってもらえるような結婚相手を見つけないと彼女たちの話声が聞こえる。とても良い34回目の結婚記念になる。

■英会話教室

英会話教室が始まる。事前にクラス分け試験があり自信喪失している。英語力は大学入学時がピークでそのあとは落ちる一方、やはり言葉は使わないとダメである。

クラス分けがなされているので同じレベルの生徒が集まるようになっているのだが、どうも他の人はみんな英語がしゃべれるように感じる。

ここにきて劣等感を味わうとは思わなかったが、英語やるなら今でしょう。何しろ全35回の教室に挑戦するので10万円も払っている。

私の先生はカナダの青年で、26才のハンサムボーイで身長180cm以上、スリムでとても女の子に人気がありそうである。もてすぎて困るようならば我が家に伝わる「女かき分け棒」を貸してあげようかと、上達したら英語で話してみたい。

そして生徒たちはというとお嬢さん1名、おばさん3名、おじいさん2名である。お嬢さんは実践型の英語を話す。おばさんたちは品の良いおばさん、活発なおばさん、親しみやすいおばさんである。みんな地元の英会話スクールに頻繁に行っているような感じで、きれいな英語を話している。

おじいさんは昔船にでも乗っていたような人で、昔取った杵柄の感じの英語を話す。スリランカはセイロン時代に訪れたことがあるとかで、スリランカへ国名変更のなったのは1972年なの

で、そんな大昔にセイロンに来るとはただものではない。

後日、英会話教室のウェルカムパーティが開催される。パーティといっても英語のレッスンのようなものでダンスあり、カラオケあり、ゲームあり、クイズありであるが全て英語行われる。いやスペイン語の授業もあるので一部はスペイン語である。

生徒たちが一同に会するのはこの時が初めてで、およそ 100 人いることが分かる。意外に参加者は年配の人が多し。そもそもこの船の乗客は年配者が多いが、こんなおじいさんまでも参加しているのかという人までいる。しかしながらみなさんととも英語がうまい。

■朝から晩まで洋上生活は多忙

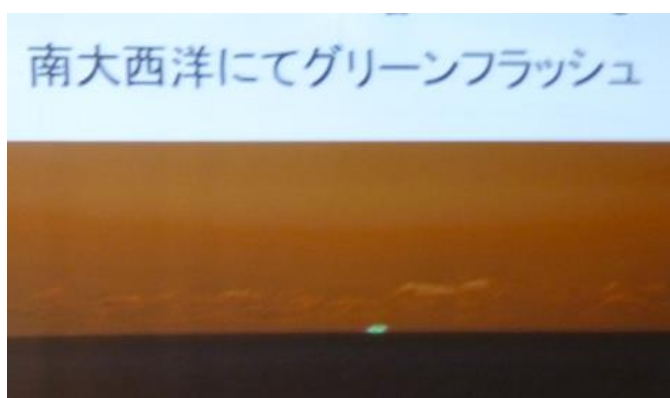
今日も朝から英会話教室通いである。錆ついた会話力を磨くのは大変である。

本格的に落語の練習を始める。まず覚えるために 100 回くらい書き写したノートを見ながら話す。口が覚えなるといけないので話すしかない。そして覚えたら鏡を見ながら振り付けや言葉の強弱や声を区別して 50 回くらい演じて完成させていく。

100 回を目標に練習していくのだが本日は 10 回しゃべったが、やはり相当に疲れる。一つの話が 15 分くらいなので 150 分は、老骨に鞭打つという言葉があるがまさしくそんな感じである。

落語と英語、習得は似ている。落語の練習後に本日の英会話の復習と宿題をする。そんなことをしていると夕方になっている。

航路説明会でグリーンフラッシュという太陽が水平線に沈む時にほんの一瞬だけ緑色に発光する現象があるという。夕焼けが赤いのは大気中の浮遊物の散乱で波長の長い赤い光だけ届くためであるが、極稀に大気が澄んでいると緑の光も届くことがありグリーンフラッシュになる。



この説明会のあとの夕陽がきれいな日は、みんなこのグリーンフラッシュを求めてカメラ片手にデッキに集まる。でもそんな簡単にグリーンフラッシュにはお目にかかれない。

夜、スリランカ最南端の灯台ドンドラヘッドがおすすめということでデッキに出てみる。インド洋の夜風がさわやかに感じとても気持ちよい。さて問題の灯台は確かに 5 秒に一回発光している明かりを確認できるが、あまり大きくは見えない。

千葉県の犬吠埼に行った時に近くのホテルに宿泊して灯台の閃光とその周期に感動したが、そ

のイメージからは程遠い。犬吠埼の灯台は光の周期が 15 秒で、部屋の明かりを消して波の音と灯台の 15 秒周期の光を肴にして酒を飲んだことを思い出した。

陸地から数キロ離れた船から見るのだから仕方ないかもしれないが、期待していたものとの落差は隠せない。それでもこのドンドラヘッドの灯台の光を見るのは多分一生に一回であろう。

夜遅く、12 時を越えようとしている頃に、南十字星を見るためにデッキに出る。しかし、どのような大きさか方向もわからない。部屋に戻って電子辞書を引くと 4 つの星で、ほぼ南に見えるという。十字の一番下の星が一番明るくて、時計の針の方向に暗くなっていくということはわかったが、実際どのくらいの大きさかはわからないので見つけれない。

パソコンをインターネットにつなげて、その見分け方のサイトがあったのでそのページを取り込む。妻も一緒にデッキに出て、腕時計のコンパスにより南方向にパソコンを見ながら探す。

南十字星の左方向にポインターと呼ばれる明るい星があり、それをまず探す。そしてとうとう南十字星を発見する。

カシオペア座よりも少し小さいくらいの大きさで、ほぼ真南に見える。とても感激したので近くにいる乗客に声をかけ、喜びを分かち合う。さらに共通エリアにいるスタッフにも声をかけてデッキに再度出て教えると、みんな感動している。

今回の旅で南十字星は是非見たいと思っていた。これからの航海は徐々に北上するので良いタイミングで南の夜空から贈り物をもらうことができた。

■スリランカは喧噪の世界

スリランカに寄港、港のゲートを抜けるといきなり喧噪の世界、そして暑い。犬が道端で死んでいる、いや暑くて寝ているだけかもしれない。そんな光景がたくさん目に留まる。まだ朝なので多くの人々は忙しそうに歩いているが時々人間も道に横たわっている、死んではいないようである。すごいところに来てしまったと一瞬思う。



タクシーやトゥクトゥクと呼ばれる三輪自動車に乗らないかとひっきりなしに声を掛けられる。そんな中を歩いていると自称銀行員という人から声を掛けられ、これからオフィスに行くところだが行きたいところはあるかと聞いてくる。会話をしていると日本の総理大臣の安倍晋三が来たことなど知っていて困っている観光客に親切にしてくれるビジネスマンと思いこむ。

トゥクトゥクに案内され値段を聞くとメータ制だと、乗るならメータ制のものに乗れと聞いていたので少し安心して乗りこむ。そうしたらその自称銀行員も一緒に乗り込んでくる。ちょっと変な気がするが、まあいいか。

自動車とトゥクトゥク、そしてオートバイの排気ガスとクラクションで騒然とした街の中ではあるが、トゥクトゥクは屋根があるオープンカーみたいなものなので直射日光からは逃れ風を切って走るのでそれなりには快適である。

名前はわからないがヒンズー教寺院に連れていってもらおう。生まれて初めてのヒンズー教寺院である。靴をぬいで靴下もぬいで、脱帽して中に入る。薄暗い中で独特の雰囲気である。

そして仏教寺院のガンガラーマ寺院に行くと日本人観光客も多くいて、なんと船で知りあった東北の S さん夫妻に会う。彼らも自由行動ということで朝早くから出て行ったようである。

この寺は博物館と一体になっていて、もちろん靴を脱いで入る。大きな仏像、ブッダの髪の毛の展示、大きな菩提樹やコンクリート製の実物大の象などコンパクトにまとまっている。大きな仏像といっても日本の奈良や京都に比べればはるかに小さく、威厳もない。コンクリート製でペンキを塗ったような感じである。

シーマ・マラカヤ寺院に行く。この寺は池の中に作ったもので長さ 20m ほどの橋でつながっており 20m 四方ほどの本堂のみの施設である。施設という意味はここでお坊さんがいて修行したり拝んだりしているわけではなく、ただオープンなお堂があるだけである。

■危険信号

ガイドしてくれている自称銀行員によればスリランカといえば宝石だそうである。工場に連れていくという。

詳細な内容が彼の英語からは理解できないでいると、盛んに身振りを交えて説明するが、いっこうに理解できない。するとあきれたように **Study English** と言われた。**Study English** はさすがにショックである。英会話がうまくないのは自覚しているが、さすがにふがいない。

工場みたいな宝石屋に連れていかれるが、こんなところで宝石を買う気もなく、断って立ち去る。するとセイロンティーを勧めてくる。スリランカといえば昔の名前はセイロンで、この島で栽培した紅茶をイギリスに運んでいたのである。

セイロンティーの店までトゥクトゥクを走らせて中に入ると、また S さん夫妻がいる。そして客は彼らだけである。よくもこんなに遭遇するのか不思議である。話を聞くとトゥクトゥクの運転手と交渉して、貸し切りで案内してもらっているとのことである。でもどうも胡散臭いのでぼられないか心配しているという。当方の事情を話したら船にもどったら情報交換をいようということになり分かれる。

S さんの件で心配になり早々にこの自称銀行員ガイドと別れたほうがよさそうなので、もう結構だから降りるということ告げる。するとしつこく他にほどこへ行きたいところはあるかとか食事はどうするのかなど話しかけてくる。きっぱりと断ると、トゥクトゥクの運転手になんと **20 thousand** ルピーを要求される。私は **20thousand** ルピーを **20US** ドルと勘違いして、そのくらいならいいかと渡そうとするとトゥクトゥクは現地通貨しか受け取らないという。

現地通貨で **20US** ドル相当は財布にないので、両替したいという両替にはパスポートが必要ということでクレジットカードの **ATM** の前で降ろされる。操作したが支払できないという表

示になる。すると別のところに行き再度降ろされる。20US ドルは 2000 ルピーくらいなので 2000 ルピーをおろそうとすると自称銀行員によってさらにゼロを 1 つ追加された。なんと 20000 ルピーを ATM から引き出すし、トゥクトゥクに乗り込むと即座に自称銀行員は私の手からその札を取り上げて運転手に渡す。この一連の事態に私は頭の中は真っ白になり思考回路が停止している。ともかく早くこの銀行員と称する男から離れないといけないと思い、強引に分かれた。

分かれてから ATM の明細を確認してようやく 20 thousand ルピーということに気が付く。あとの祭りである。

冷静になって考えると、なんとバカなことをしたのだと悔やむことしきりである。きっと運転手もグルだったような気がする。日本円換算で 15000 円も払ったことになる。

自分が冷静さを失って真っ白になったこと、さらにそれは英会話力の能力不足から始まっていることであり、反省しきりである。

■ 値切りに値切る

スーパーマーケットに立ち寄りフードコートでビールを飲む、タイガービールロング缶が 230 ルピー、日本円換算で 170 円である。ここで冷たいビールを飲み、ようやく自分を取り戻す。そのスーパーマーケットでセイロンティーとスリランカのカレーをお土産用に購入、スーパーマーケットは当然安い物価は日本の 1/2 から 1/3 くらいである。

ショックから立ち直り、道端で革製品を売っている路上販売でベルトを購入することにする。1000 ルピーあるいは 7US ドルということなので、もう現地通貨の手持がないので US ドルで交渉する。最初から目標値 3US ドルと決めて交渉すると 5US ドルくらいまではすぐにいったが、そこから頑張って 3US ドルまで下げるのは大変であったが 3US ドル以外では買わないという姿勢が伝わったか、根負けしたか最後は目標通りで決着することができた。

なぜ値切りに固執したかという英会話教室の宿題がスリランカで値切り半額以下にして、買ったものを持ってこいというものであったから、最初から 3US ドルに決めていたのである。

船に戻ると船の前にも臨時の土産物屋が出店しており、ここでも半額以下を目指し交渉する。我が家の玄関を入ったところに各国で買って来た土産物を飾るスペースがあり、我が家では玄関シリーズと呼んでいる。この玄関シリーズのための買い物である。石造りの小さな象 5US ドルを 2US ドルに値切り倒す。最後はナイスガイなどと店員をほめちぎりの決着である。あまりに安いので包装もしてくれない。象の中にさらに小象がいる石の置物で小さいが凝っている。ただし、店員はあきれている。

この 2 つの値切り交渉で、20000 ルピーをほんの少し取り返した気になる。船のオプションツアーに行くと一人分で同じくらいかかるので、まあオプションツアーに行ったと思って自分を納得させることにする。

帰船後の夕食時に S さん夫妻とまたまた偶然に会う。早速トゥクトゥクについて情報交換会である。なんと彼らもやはり被害にあったということだ。日本円で 10000 円くらいだそうである。結構気を付けていたそうであるが、相手が上であったということである。

振り込め詐欺とはこんな感じで引っかかるのかと実感する。

それにしてもマレーシアとシンガポールは安全で友好的だったことに比べるとこんなこと

が日常的にあるスリランカとはものすごく印象を悪くしたのがとても残念である。

■日本から吉報が届く

4月27日は娘の誕生日だったので誕生日おめでとうメールを送ったら、その返事が娘からきている。娘が妊娠している旨は出航前に聞いていたが、病院に行ったら双子ということが判明したと書いてある。

しかも小さな命が2つ見えるエコー写真まで送ってもらう。インド洋上でリアルタイムにこんな情報を写真付きでもらえるとは医療技術の進歩は本当にすごいと感じる。

妻は喜びのあまり涙を流している。

いきなり双子とは大変だが、頑張ってもらいたい。予定日は12月なので帰国後である。

妻の頭のケガ、スリランカの詐欺、悪いことが少し続いたが、人生悪いことだけではないようだ。そして私たちもジジ・ババになる。

■船のブリッジ見学

操舵室の中を見学させてもらえるブリッジツアーに参加する。同行する事務局長は元船長ということで船には詳しい。なんでも30万トンの船だったということで、その船を20人ほどの船員で運航させていたと知っているのだからきっとタンカーである。

現在の船は全て電子化されていて、モールス信号などは使わないので通信士はいないという。航海士と操舵士のペアで航行をさせているという。航海士は一等、二等、三等と乗り込んでおり時間帯によって一等航海士はいつ、二等航海士はいつと決まっている。

操舵室は左右に広く、左右の端の部分は海上に突き出した格好になっているので海面を上から見るができる。着岸させる時にあと何mとかがわかるようにということである。それにしてもブリッジからの眺めは最高である。

説明の中で面白かったのは、船の対外的な交信は全て英語なのでアルファベットを間違えないようにAならアルファ、Bならばブラボーというようにアルファベットは単語で表現する。

緊急事態を想定した避難訓練の冒頭に船内放送はブラボータンゴ、ブラボータンゴという言葉から始まるのはBTという緊急事態を意味するアルファベットを意味しているという。なんでブラボータンゴなのだろうかと不思議であったがようやく理解する。

■海賊対策

海賊対策の避難訓練が本で行われ、乗客は部屋に入り施錠し窓のカーテンを閉めるというものがあるが、その時もブラボータンゴからはじまった。船内はその海賊自主対策のためにカーテンや板を張る作業をしている。今夜から夜間の外部照明が消え、窓のカーテンを閉めて、船のデッキ部分への使用制限がかかる。海賊はソマリア沖が主戦場であるが、早めの自主対策をスリランカ西方500kmくらいのところから実施する。ソマリアが無政府状態になったので漁民が海賊化しているのだそうで、怖い話である。こんな経験も地球一周の船旅でないと味わえないが、実践はしたくないものである。

しかし、悪いことだけではない。明かりが消えるのできっと星がきれいに見えることに違いない。

インド洋は嵐である。ここ数日こんな状態が続いている。嵐は海賊にとっては好機ということで油断できないようである。

本日から自主的な海賊対策ということで夜間のデッキ部分へ外出が制限され、公共スペースの窓は遮光するためのカーテンが張られている。私たちの船室は6階なので、船室生活はあまり変わらないが夜間にカーテンを閉めることだけある。ただし5階以下の場合は海賊が窓を壊してはならないように窓に厚い鉄板を張る。実際に張り終えた部屋の人に聞くと昼間も真っ暗で息が詰まるという。

海賊危険海域はインド洋ソマリア沖から紅海に入るところである。数隻の民間船が縦に航行する前後に海上自衛隊の艦船が護衛してくれる。この合流ポイントの集合時間が早まったということで旅行日程も若干早まりスエズ運河通過が一日前倒しになり、ギリシャに一日多く寄港するという予定変更が発表される。

この船にはカルチャースクールや講演のために文化人と呼ばれる人々が乗船している。その中でジャーナリストの松本仁一さんも乗船しており、この船に乗って時おり講演を聞きにしているがなかなか面白い話をしてくれる。

その中で海賊の話があったが、海賊は誘拐して身代金を得ることが目的なので、このような大きな船は人が多すぎてねらわないだろうということである。しかも誘拐しても年寄りが多いので薬を飲んだり、医者に見せたりで手がかかるのでそんな面倒なことはしないという言葉に一同大爆笑である。

乗客を安心させるためのリップサービスもあるのだろうが、その言葉にみな安心したようである。ただ、それならば船長や一部の乗客を誘拐すれば済むことなので冷静に考えればあまり説得力がない。

乗船するまでは海賊の心配をするとは全く思ってもなく、世界は広くいろいろなことがあるということを改めて感じる。何が起こるかわからないので旅は面白いのかもしれない。

しかし、所詮は何とかしてくれると思っており、心底から恐怖とか安全への心配は感じていない自分がいることにも気が付く。どこかディズニーランドの海賊アトラクションのような感じかもしれない。

■尊敬するインドネシア人

ゴルフの練習に行くと、いままでの担当のインドネシアボーイがシンガポールで下船したので別のインドネシアボーイに代わっている。彼の名は長くて忘れたが12月にシンガポールから乗船して今度の航海で世界一周が2回目になり、3回目のシンガポールで降りるという都合8か月間の勤務だそうである。

昼はゴルフ練習場の受付兼片づけ、夜は船内の居酒屋で働くが私がいつも行くエリアでないとこで働いているので初対面である。

33才で6か国語が話せる。彼の出身地はインドネシアであるがインドネシア語ではなくジャワ語が母国語で、それからインドネシア語、アラビア語、英語、韓国語、日本語もちろんできる。日本語はかなりうまいのでどこで勉強したのか聞くと滋賀県彦根市にいたとの返事である。

ゴルフ練習場の受付の仕事は暇で、その時間を使って彼は日本語の漢字の勉強をしている。各寄港地では半日くらいの自由時間があるらしく、世界 2 周のワーキング船旅で日本人とも話しながら世界をまわり勉強しながらお金を稼ぐという一石 3 鳥をしている。

何より誠実で勤勉で、その姿勢や物腰の低さは尊敬に値する。こういう人と友達になりたいと心から思う。

■ジャーナリスト松本仁一さん

「私が影響を受けた三冊の本」というテーマのジャーナリストの松本仁一さんへのインタビュー講座があるので参加する。内容はタイトルのおりで 3 冊を紹介するのであるが、その 3 冊とは「イワンのばか」「知られざる革命」「THE DOG OF WAR」ということである。人間とは何かとか、国家とは何かというような観点で選定したという話である。

私はむしろこの本の内容よりもこのような企画に少し興味を持つ。自分がこのようなテーマで本を紹介しようとしたら、何を紹介するのだろうか。面白かったというだけでなく、どのように自分の人生に影響を受けたのかとかを考えていくと、いったい何を選ぶことになるのだろうか。あれこれ自問自答していく。今回の船旅に持参してきた本は「深夜特急」、「逆説の日本史」であるが、この 2 冊は私のこの旅行記に影響を与えているのは確かである。でも振り返って 60 年の人生で影響を受けた本は何なのか、考えさせてくれることがなかなか面白い。

この企画の最後にビブリオバトルという船内企画の参加募集があり、自分のおすすめの本について 5 分間のプレゼンテーションを行うというものである。バトルというのだから戦いでプレゼンテーションの内容で優劣を競うというものらしい。

今回出航直前に購入し持参したカシオの電子辞書で引いてみるとビブリオバトルは次のようである。「書評合戦。それぞれにお気に入りの本を持ち寄り、持ち時間 5 分ずつで内容や挿絵、装丁などを紹介し評価を競う集まり。谷口忠大立命館大学准教授が京都大学研究員時代の 2007 年に始め、全国の書店、大学などに広まった。」

電子辞書がこんなに役に立つとは思わなかった。今回の船旅では英会話教室はじめ大忙しである。おっと電子辞書の話ではなくビブリオバトルだ。早速、参加申し込み用紙をもらってくる。

夜、いつものように居酒屋へいくといつものメンバーが松本仁一さんと飲んでいる。早速同席して話し出す。

松本さんは朝日新聞社を 8 年前に退職しこの船には何回も乗っているとので、飲みながらも造詣の深い話をたくさん引き出しから出してくる。政治家や経済界の要人に会うことができるということが記者の特権とのかを力説している。その中でも異色だったのはイチローに会った時のことだと話してくれる。

インタビューで人に会うためには準備することが肝要で、イチローはプロ意識の塊であるので記者にもプロ意識を要求する。勉強不足な質問をするとロクに話もしてくれないが、松本さんは勉強してインタビューに臨んだのでイチローもプロとして認めてくれてペラペラ話したというもったもな話である。

洋上の居酒屋で有名人の実話をジャーナリストから聞けるとは思わなかった。その他にもキューバのカストロ議長、小沢一郎、辻本清美、土井孝子、黒柳徹子、長嶋茂雄などの実際の話で夜

遅くまで盛り上がる。

■ファッションショー

5月1日はファッションショーなるものが企画されている。寄港地で買った民族衣装や日本から持ち込んだ着物やドレスに身を包んだ紳士淑女が登場するらしい。私の妻も参加するという。妻は38年ぶりのドレスを着るのだが、妻の母の手作りのもので何やら思い出深そうである。

開場時刻前から既に50人くらいの人が並んで待っており事前の盛り上がりはすごい。私も妻の晴れ姿を撮影するので前のほうに陣取るためにその列に加わる。

いよいよ開演、いつものように司会者と通訳がいて日本語と英語で進行していく。出演者は全部で45組、一人当たりの持ち時間は30秒程度、ステージ中央で決めポーズをとるようになっている。ステージを見ていると出演者の性格がでる。さっと引っ込む人やいつまでもアピールする人など様々である。

衣装はスリランカで買ったサリーが多く、チャイナドレスやアオザイ、日本の着物など様々である。圧倒的に女性が多く、若い女の子も昔の女の子も女性はきれいに見せたいというのは普通の法則なのだろう、みんな気合いが入っている。

女性に混じって男性も数人登場する。着物の着流しの人が、私の目にはかっこよく粋に映った。その他の男性陣はお笑いの受け狙いで、ファッションショーとは言い難い。

妻は前半の最後で登場、38年前のドレスはその年月を感じさせない。そんな紹介を司会者がすると会場からはすごいという歓声も聞こえる。作った妻の母への土産話といい思い出になるだろう。

■自衛隊に感謝

朝8時から海賊多発危険海域なので海上自衛隊の艦船に守られて航行になる。アデン湾の入口にあるポイントCと呼ぶ場所からジブチ沖のポイントAと呼ぶ場所までの航行である。昨日仕入れた情報ではポイントC地点に集合して隊列を組んで10ノット（時速約18km）で航行しジブチ沖のポイントAまで2日間かけて行く。10ノットと遅いのはタンカーなどの遅い船に合わせるためであろう。

朝食後にデッキにでると自衛艦が左舷前方にいる。後部甲板にヘリコプターも見える。マストには旭日旗が上げられている。何かうれしいような、安心するような気がしてしょうがない。まさしく自衛であるが、自衛隊がこんなに頼もしいと感じた日はない。海外で言葉が通じずに困っていると日本語ができる外国人に会ったようなものである。

自衛隊の海外派遣に反対する人たちもこんな経験をすると変わってくるかもしれない。そういえばこのNGOピースボートも自衛隊の海外派遣反対だそう。しかしながらこのように自衛艦に護衛されることは否としないようだと、どこかの新聞でたたかっていたのを思い出す。

私の友人に海上自衛隊の幹部が何人かいて、その彼らの顔が浮かんである。私は珍しく心から彼らに感謝していることに気が付く。

護衛を受ける船は私たちの船以外は3隻のタンカーである。当初はコンボイを組んで前と後ろに自衛艦が付くと聞いていたが、4隻しかいないので自衛艦一隻に先導されての航行である。直線の隊列ではなく五角形になっていて自衛艦が先導している形である。



■影は消えない！？

昼頃に太陽がほぼ頭の真上に位置し、影が消えるという現象を体験する日程が本日あたりである。

太陽は彼岸で赤道、夏至で北回帰線、冬至で南回帰線の上までくる。彼岸と夏至の間なので北半球を航行中に太陽が真上から照射するポイントに遭遇する。そのため影が真下にしかできないので垂直に立つポールなどは影が消えるという説明を航路説明会で聞いていた。

北回帰線と南回帰線の間地域では年に2回遭遇するのでその時期を地上で待つか、船旅でないと体験できない。

その影が消える瞬間を撮影しようとするが、これが意外に難しい。その理由は太陽が真上から照るポイントは時間とともに東から西へと線上を移動していく。その線と船が北上する航路とが合致しないとイケない。問題はその2つが同じ時間に交わるという条件が加わるのでピッタリとはいかずに多少はズレが生じてしまう。したがってほんの少しであるが短い影が出来てしまう。

でも確かにこんなに頭上からの日差しは経験したことがない。まあ、今回の航海ではまだチャンスがあるのでそれに期待しよう。



■憲法記念日

憲法記念日なので日本国憲法について語る船内イベントが船内新聞に載っている。すっかり忘れてしまっていたがもう5月3日になっている。横浜を出航して3週間にもなっており時間が経つのがとても早い。

本日の朝に護衛してもらっている自衛艦からヘリコプターが発艦して哨戒活動を 2 時間くらいして着艦したが、なんとも頼もしく思う。日本国憲法を語るには自衛隊の存在について明確にすべきと思うが、自衛隊は今の私たちの船にとっては必要不可欠な存在となっている。

翌朝 7 時 00 分、本船の左舷にて護衛してくれていた自衛艦が速度を上げて左舷前方から離脱する。間もなく右舷前方から別の自衛艦がやってきてヘリコプターを飛ばして本船に近づいてくる。本船の右舷を通過して後ろのほうに向かうのだが、甲板には自衛官 30 人くらいが確認できる。

その自衛艦から汽笛が鳴り、私たちの船もそれに呼応するように汽笛を 3 回鳴らす。私は一番上のデッキにいたのもものすごい大きな音に驚く。汽笛でデッキが振動しているように感じるくらい大きな音である。

この海域がポイント A でここまでが護衛区域であるので、2 日間護衛してくれていた自衛艦はジブチの基地に戻るのであろう。

汽笛の交信は自衛艦からは旅の安全を祈る、そしてこちらは御苦労さま、ありがとうという感じに聞こえる。今すれ違った自衛艦がこれからポイント C に向かって次の護衛任務に向かうに違いない。

本当にありがとう、御苦労さまと心の中で手をあわせる。

第四章 紅海～スエズ運河

■ビブリオバトル

ビブリオバトルが始まる。出場の順番は事前にくじ引きで決まっており、私はトップバッターである。リハーサルでは問題なかったパソコンのセットアップがうまくいかないのやや焦るが、スタッフのフォローで何とか開始する。

推薦の本はいろいろ悩んで手塚治虫の「火の鳥」を選んだが、沢木耕太郎の「深夜特急」、井沢元彦の「逆説に日本史」も捨てがたく、悩んでいたが万人受けすることとそのスケールから「火の鳥」を選ぶ。

昨夜からパワーポイントでスライド 5 枚を用意しており、この本の素晴らしさをアピールする。スライドは「漫画を超えた、斬新すぎる構成」「手塚治虫が伝えたい事」「感動と興奮の出会い」「お薦めしたい理由」「ストーリーの紹介」という編成であるが、5 分間というのは少し足りない。最後の 1 枚を端折って終わりにする。やはり 5 分でまとめるのは至難の業である。パワーポイントを作っているこの有様なことから、無ければ支離滅裂になっていたと思われる。

私の他に 13 人がエントリーしており、トップバッターの私は出番が終わればあとは聞き役だけになる。半分くらいはピントがずれている様な発表であったが、3～4 人はうまいプレゼンをするなどと思う。ほとんど準備していない感がある、若者プレゼンした漫画「あひるの空」に感心する。

作品の紹介、作者が言いたいこと、感銘を受けた点など短くまとまっておきななかのものである。少しプレゼンの手法を教えてやればもっといいものになるかと思う。私にとって落語は 38

年ぶりであるがプレゼンは会社で何十年もやってきたものなので場数だけは積んでいる。日本経営品質賞でのプレゼンは1カ月で380枚も作ったのを覚えている。

若者たちに今まで培ったものを伝承するというアドバイスは、今後の自分に人生において有効な社会への恩返しかもしれない。

バトルの審査は入場順に100名が審査員になるというルールで、審査結果は年配のおじいさんが20票で優勝し、私は惜しくも17票で2位、一押しの「あひるの空」は3位にも入らない。優勝者は書評というよりも彼のキャラクターと話の受けがよかったのが得点につながったようである。

終了後、とりあえず喉が渴いたのと自分へのご褒美ということで、海を見ながらデッキで缶ビールを飲む。

そういえばリハーサル中にアラビア半島の突端が比較的近くに見えていた。だから既に紅海に入り込んでいる。

海賊危険区域は脱したはずであるが自主対策の灯火管制は本日夜も念のため行うようである。

■子供の日

子供の日なので後部デッキに鯉のぼりが3匹掲げられている。黒い大きな鯉登り、赤い中くらいの鯉のぼり、青い小さい鯉のぼりで歌のようにそろっている。後部デッキのプールの上を左舷から右舷にかけてロープを張って真下に釣り下げられて、風になびいて船尾に尾を、頭は船首に向かっているの、鯉のぼりは真っ直ぐスエズ運河目指して泳いでいることになる。

8階のイベント広場では子供にちなんで「洋上子供の日」なるイベントが開催されている。童心に返って楽しもうという主旨でけん玉、折り紙、お手玉や童謡の合唱などやっている。

子供が一人も乗っていないのに子供の日とは、どうも違和感がある。私は缶ビールを片手にデッキで海を見ることにする。

サウナでよく一緒になる人が言っていたが、この船の子供だましのイベントが嫌いで一切参加しないという。その彼が老人ホームの学芸会と称していたことを思い出す。

■外国人と温泉談議

通訳CCのリーダ格のオーストラリア人と話す。彼は通貨の講座を担当しており、大変面白い説明をしてくれるのでお礼の意味をこめて「この前の講演はよかったよ、次回も期待しているよ」と声を掛けたところ、いろんなことを話すことになる。

オーストラリア生まれで、日本に来て10年だそうだが日本語は非常にうまく、漢字も読み書きできるという。したがってほとんどは日本語でのコミュニケーションになる。

日本について非常に詳しく、山登りと温泉が好きだという。山は日本百名山にはほとんど登っており、二百名山を目指しているという。そして温泉の話になり青荷温泉、不老不死温泉、玉川温泉、酸ヶ湯温泉、乳頭温泉、宝川温泉、草津温泉、万座温泉、薬研温泉などについて語り合う。自称温泉通で温泉評価委員会を立ち上げている私と対等に温泉について語るができる人は少ない。

横浜の飲み屋のママさんが群馬県出身で温泉大好きなのでいろんな温泉について話をして意気投

合したが、それ以来である。しかも外国人というのがすごい。

オーストラリアにも温泉があるのかと聞くと、ほとんどなく 3 か所しか知らないという。火山や地震もないのかと聞くと、活断層があるので地震はあるが極めて稀で地震という言葉は知っているだけで体験がない。日本は地震が多いがその分温泉があるので表裏一体だという。

表裏一体、そんな言葉まで知っているとは驚きである。ついでに表裏一体を英語で言うとなんというのかと聞くとちょっと考えて **two sides of the same coin** と返ってきた。

彼こそが本当にバイリンガルだと思う。日本の文化について一般的日本人より詳しい。日本各地を旅しており文化も知っており経験も豊富である。

キャンプそれも極寒キャンプの話をする。誰もいない猪苗代湖畔で白鳥の鳴き声を聞きながら、たき火をしてホットワインを飲みながら語り合うと説明するとそれに是非行きたいという。

なんて贅沢なキャンプなのだと驚いている。彼のモットーは「お金をかけない贅沢」だという。体験することが重要であり、体験にはお金をかけたいがモノには固執していないとのことである。

体験の重要さは私も彼の考えにとっても共感する。そして「お金をかけない贅沢」とても良い言葉である。この言葉は私の旅、いや人生のポリシーにしたいくらいだ。

そんな話を 10 分か 20 分していたが、外国人と熱く語っている姿を遠目に見ていた人には私が英語ペラペラに見えたに違いない。

これを本当に英語で話せればもっともって世界が広がる。

■夏祭り

5 月なのに夏祭りイベントがある。祭りは 9 階のプールデッキで行われる。船の現在位置は紅海の北部で、アジアの暑さはもうない。両岸は砂漠地帯なので日陰は涼しい。

和太鼓のパフォーマンスから始まり、総勢 100 人くらいの太鼓隊は壮観である。和太鼓の練習は人気があって、船が用意している太鼓が 5 つしかなく、順番待ちが発生している状況であると太鼓を指導している方から聞いている。日本の祭りはやはり太鼓だ。

浴衣ショーに夫婦二人でエントリーしているので、これに出演する。私も元大学落研で浴衣は着ているし、妻も浴衣や着物は好きなので着るが、最近は二人ともあまり着たことがない。ましてや夫婦一緒というのは多分初めてになる。

浴衣ショーといっても浴衣を着てプールサイドを一周するだけで、出演者の紹介のアナウンスを日本語と英語でしてくれる。それだけの話だがいい思い出になるので申し込んで良かったと思う。

「主張」というイベントに出演をお願いされる。同じ神奈川県のおすぐ近くの海老名在住の若者に頼まれる。あまり参加者がいないようなのでサクラ出演の依頼で、二つ返事で引き受けたが意外に難しい。

時間は自由で誹謗中傷や政治のことでなければ何でもいから訴えたいことをみんなの前で言って欲しいという。一番高い 11 階のデッキから下のプール周辺の夏祭り会場に向かって何か主張するのであるが、時間は 1～2 分、問題は内容である。

会社員時代に私に勤めていた会社では毎日朝礼をしており所感を持ち回りで発表することにな

っていたが、それと同じようなものである。ただ、何百人もの人が相手に価値観がみんな違う。ただ旅行を楽しもうというものでは主張にならないし、あまり硬いのも受けない。いろいろ思案した結果、歴史教育にすることにする。

かねてから私は日本の歴史教育の問題点を明らかにし、改善する方法を主張していた。中学高校の歴史教育は古代史から始まり、3 学期頃によく明治維新あたりを勉強するのだが、重要な昭和史は時間がなくなり、あとは教科書を読んでおくようにということで終わってしまう。

歴史は現代に近いほど重要だというのが私の考えである。現在のこの状況を作り出したのが少し前の過去で、その状況を作り出したのがさらにその前の過去でというように結果と原因で歴史を見ていくという考え方だ。そこで主張としては、歴史を現代から遡って教えるということにある。これだと時間がなくなっても邪馬台国以前は教科書を読んでおくようにでも問題ない。

英会話の先生たちも浴衣を着ているが、大変な着付けの方もいる。見かねて着付けを直してあげることや、私の英語の先生に至っては着付けのやり直しである。日本文化の理解に貢献できればという思いである。私たちがどこかの国へ行って民族衣装を即席で着せてもらうことがあるがそんな感じなのであろう。

祭りの最後は盆踊りでしめる。上州群馬出身の私にとっての盆踊りは八木節なので、他はあまり知らない。他の踊りを踊ろうという気にならないので、見ているだけである。

■紅海

コロンボを出航してずっと洋上で、次の寄港地の地中海キプロスまでは 12 日間の航海がつづく。そして今は紅海にいる。

紅海はインド洋のアデン湾とは何となく景色が違うように思える。インド洋では水深 4000m あったが、紅海の現在の水深は 60m である。海水の色も少し違うようで、紅海というくらいなのでこれから赤くなるのかと思うとワクワクしてくる。

そして水温 39℃もあり、両岸が砂漠で川がないので真水の流入がなく塩分濃度が高い。それは閉ざされた海だからで、私たちが入ってきた紅海のインド洋側の入口のバウエルマンデルというところは狭い部分で幅 26km しかない。これから行く反対側はスエズ湾で、その奥はスエズ運河になる。スエズ運河ができる前は、この海は本当にどん詰まりである。

紅海はなぜ赤いのか、藻が原因という説が現在は定説らしい。確かに私が海を見ている限り、今のところ赤くなることもない。ただ、海藻がやたらと浮いているのが目に留まる。海藻の色は黄色みがかかった茶色で黄土色という感じである。

陸地が見えてくる。島らしいが、私が知っている島の様相と全く異なる。緑が一切ない茶褐色の島で、白い部分もある。草木が全く生えていない岩の大地に白い部分は砂のようである。こんな島は日本では全く見るできない。

私にとって紅海は、最も不思議で興味深い海である。

■スエズ運河通過

5月8日いよいよスエズ運河である。前日の夜6時頃に運河手前で碇をおろして待機しており、本日朝5時10分に運河突入である。スエズ運河は1869年に完成したもので距離は162kmもある。ユーラシア大陸とアフリカ大陸を分ける運河である。1869年といえば明治維新である。そんな時代に、運河開通とは驚くばかりである。

運河には勝手に入るのではなく船団を組んで運河に入る。通常は客船が先頭になるようで、私たちの船が先頭である。その後ろを大きな貨物船が何隻も続いたの航行になる。

砂漠の中を切り開いて作ったスエズ運河兩岸はほとんど砂漠であるが、時折左側つまりシナイ半島ではなくアフリカ側の方に緑の木々と街並みを見ることができる。よくもこんな砂漠の真ん中を掘ったものだと感心してしまう。当時は重機がなかったから人力で掘ったというのだから通行料も高いはずである。なんでも私たちの乗るこの船一隻の通行料は2000万円だそうである。

約千人なので一人2万円相当になるが、その価値は十分にある。この運河がなければアフリカ南端の喜望峰を回って大西洋にでて地中海にはいることになり、その分の燃料費や食料は一人2万円では到底足りない。

全てを掘って作ったと思っていたが、運河中央付近は大きな湖が2つある。湖といっても今は海水湖であるが、この湖の存在さえも私は知らなかった。

第二スエズ運河が昨年夏にできた旨を航路説明会で聞いていたが、本日その第二スエズ運河を航行する。右と左に分かれている部分があり右が第二で左が旧のスエズ運河であり、地中海に抜けるほうは新しい右の第二スエズ運河を通過することになる。

通行量が2倍になり1日あたり49隻が97隻になったという。先ほどの通行料も2倍になるので1日に約20億円か……。エジプト政府は笑いが止まらない。

左右は砂漠なので殺風景なだけであるが、その数十m向こうに旧の運河があり、反対方向から来る船を見ることができる。小高い砂漠の上に大型船ならば甲板の上の部分だけが動いているのが見えるというとても奇妙な光景になる。

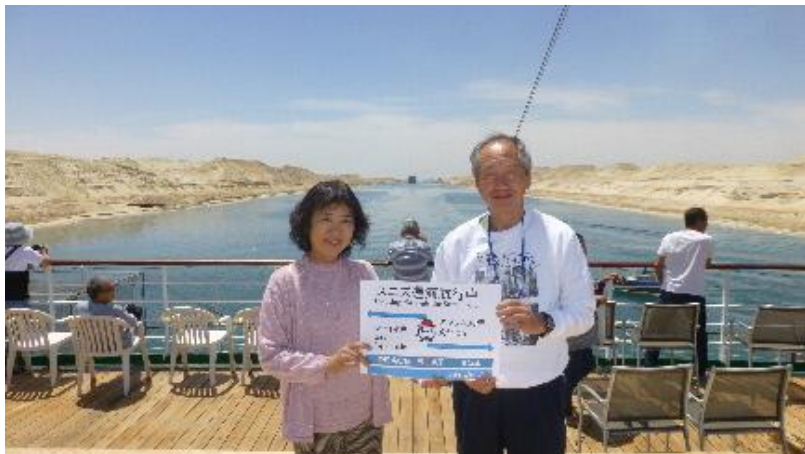
私のカメラはGPS機能が付いており、全世界の地図データが入っておりGPSを使って今どこにいるのかわかるので、この写真はどこで撮ったというのが写真データに記録される。

カメラを地図表示にしてその写真の撮影地点を表示できる。この機能で今まで日本からスエズ運河までの航路が地図上にプロットされるといって優れものである。実はこの機能はこの地球一周の航海に出てから気がついた。日本の電気製品は機能がたくさんあるが、使いこなしている人は少ないという反省でもある。

さて、ここで第二スエズ運河を航行していると地図にデータが古いので、砂漠の上を船が航行していることになっている。ちょうどカーナビの地図データが古いと道なき道を走行するのと同じである。

クルーの若い女の子、彼女たちはシンガポールから乗り込んできたので初めてのスエズ運河である。年は20才くらい、シンガポール出航後に何人かに年齢を聞いている。日本でいうと高校を出て間もない彼女たちであるが、お化粧をして社会人として一生懸命に日本語と仕事を覚えている勤勉な姿に好感をもつ。その彼女たちがはしゃいで写真を撮っている。スマートフォンで撮り

合ったり、みんなで記念撮影したりする姿になぜか私も感激して涙が出てくる。



地中海に抜ける少し手前に大きな橋が架かっている。日本の ODA で建築したもので平和大橋という名がついており、橋の中央にエジプト国旗と日の丸のモチーフがある。橋の高さは 140m であり、クフ王のピラミッドとほぼ同じにしたようだ。この大きな橋はユーラシア大陸とアフリカ大陸に架かる唯一の橋だそうだ。

地中海に入る。時刻は昼の 15 時 50 分、10 時間 40 分もの壮大なスエズ運河ショーが終わる。